

平成二十六年二月五日 最終講義

## 「遊び」再考

山 田 英 美

### はじめに

こんにちは。今日は卒業生の方たちも仕事を置いて聴講にきてくださっており、ありがとうございます。

本学福祉学科こども学コースの学生が保育所などでこどもたちの姿を見ようとするとき、大抵、こどもたちが遊んでいる場面を観察します。否、こどもはいつでも遊んでいるから、というのが実情でしょうか。だから発達研究にしろ保育の研究にしろ、「遊び」とかけ離れたところには在り得ないのです。私の幼児心理学系の講義でも「どんな遊びでも、何かの意味がある」という観点から遊び行動をどうとらえるかということを軸にして進めていました。また文人類学や精神医学の領域でも「遊び」に着目したものがたくさんあります。「遊び」には研究のタネが詰まっております、つきることのない宝庫と言われる所以です。

私の最終講義として、遊びの本質に迫るべく、こういった広い研究の領域を概観して「遊び」を再考したいと考えました。

「遊び」再考（山田）

「遊び」再考（山田）

困った目次に沿いつつ、その時々に関連したエピソードなどを交えてお話ししていきたいと思えます。

「遊び」とは何か

ホイジンガ「ホモ・ルーデンス」1938

ブリューゲルの絵「子供の遊戯」1560

「遊び」に関する学際的研究の展開

(1) 人間のこどもは（おとなも含め）どのように遊ぶのか

・哲学、教育学、歴史・人類学的研究

カイヨワ「遊びと人間」1958 遊びの四つの型

(2) 遊びは文化によってどうかかわるか

・文化人類学的研究

(3) こどもの遊びはどのように発祥したか

・民俗学的研究

(4) 精神的健康と遊びの関係

・臨床心理学、精神医学的研究

「遊び」とは何か

「遊」「遊」という字は、水の流れのようによどまず、『くのために』という目的にとらわれずに自在に動いて、出会ったものの魂を揺さぶることをあらし、本来、宗教的な神霊の動き回ることに主に使われていました。したがっ

て、元をただせば「遊び」とは「人間的なものを超える状態」「神とともにある状態」ということであります。ここで思い出すのは、『七歳までは神のうち』と言われた古い時代の子どものとらえ方です。梁塵秘抄（二〇八年頃平安時代末期後白河法皇の編纂による歌謡集）に「遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子供の声きけばわが身ささこそ動がるれ ——」という歌が残されています。子どもは遊ぶ存在だと認めている、見事な言葉といえるでしょう。しかし

ヒトに限らず動物たちもコドモ時代はよく遊ぶことが知られています。動物園の檻の中でじゃれ合っているライオンたちや飛び回っているサルたちがいたならば、それらは決まってコドモであり、おとなたちは、悠然と座って見えています。オトナがいっしょに遊んでやるということは人間以外の動物では見られない。また人間以外の動物でオトナになってからも遊ぶのは、飼われている犬、カラス、イルカなど、わずかな数。それも、人間が見て遊んでいると思う動きをしているというものでしょう。だが、人間だけはおとなになっても遊ぶ。

生涯を通して遊びと密接にかかわっているのが人間だということを、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ（1872-1945）は「ホモ・ルーデンス Homo Ludens」（1938）という言葉を使ってあらわしました。彼はその著書の冒頭で「人間文化は遊びの中において、遊びとして発生し、展開してきたのだ」と述べ、「文化に先立って遊びが存在した」という歴史観を示しています。また彼は、日本語における「遊び」の表現という項で、日本人が使ってきた遊びという言葉のもつ機能全体に対して触れており、真摯とか正直、厳格な生真面目さの対極にある「遊び」のほかの、特殊な意味合いを持つ日本語の側面も指摘しています。即ち「師のもとに遊ぶ」とか「土地に遊ぶ」というような言い方があることで、これは遊びという意味のラテン語「ルードゥス ludus」が「学校」という意味を持っていること

「遊び」再考（山田）

を連想させること。さらに上品な言い方として「遊ばせ言葉」が今日でも保たれていること。高貴の存在は、その行うすべてのことを常に遊びとして、遊びながら（余裕をもって）やっていることを意味している というわけです。（高橋訳1973）

フランドル（現在のベルギー辺り）の画家ピーテル・ブリューゲル（1525/30-1569）の描いた「子供の遊戯」  
1560JUGUPT

この有名な一枚の絵は、商業都市として栄えた町の広場をモデルにしているとのこと。1568年というと、日本では桶狭間の戦いがあった年で、戦国時代まったただ中ですね。このころのヨーロッパの子どもたちはどんな遊びをしていたのか、と、細かく見るととてもおもしろいものです。この一枚の絵の中にざっと二五〇人の子供が九〇種類の遊びをしている様が描かれています。これを素材に研究した人があって、森洋子（1936-）という方です。図を色抜きでトレースして、調べています。その図を借りて示すと次のようです。

1 お手玉遊び	2 人形遊び	3 人形の家	4 祭壇ごっこ
5 梟の巣箱	6 水鉄砲	7 仮面遊び	8 プランコ遊び
9 ぐるみの風車遊び	10 シャボン玉遊び	11 小鳥遊び	12 ガラガラ遊び
13 石が脚にあたるぞ	14 洗礼ごっこ	15 目隠し鬼ごっこ	16 子供椅子
17 いくつもっているまたは奇数が偶数か	18 棒馬	19 子守りごっこ	20 ロンメルポットと縦笛
21 お粥のかきませごっこ	22 輪回し（男子用）	23 輪回し（女子用）	24 樽栓の穴から叫ぶ
25 シーソー（樽揺らし）	26 風船（豚の膀胱）遊び	27 尻打ち	28 牡山羊、牡山羊よ、ふらつくな（鹿鹿、角何本）
29 お店やさんごっこ	30 ナイフ立て	31 煉瓦積み遊び	32 髪の毛むしり
33 昆虫を捕まえる	34 ヴォラールト（パンの名称）遊び	35 帽子、帽子を脚の間から	36 兎跳び
37 線の上での引っ張りっこ	38 足蹴り	39 嚙みタバコ転がり	40 梨の木になる（逆立ち）
41 でんぐり返し	42 柵をよじ登る	43 柵の上でお馬乗り遊び	44 花嫁行列ごっこ
45 目隠し鍋たたき	46 低い竹馬	47 目隠し鬼のスリッパとり	48 ひと山に当てる、塔に向かって投げる
49 ぐるぐる回り	50 高い竹馬	51 ぶらさがり（横木に回転する）	52 棒立て（バランスごっこ）
53 肥った仔牛、または袋のかつきごっこ	54 投げ独楽（コマ）	55 鞭独楽	56 私の青い塔の中に誰がいるの
57 カタカタ鳴らし	58 風車で輪合戦	59 穴掘り	60 砂山へ駆け登る
61 砂山から駆け降りる	62 スカートを膨らませる	63 木登り	64 浮袋（豚の膀胱）で泳ぐ
65 足を水に浸す	66 川辺から泳ぐ	67 泳いだ後で	68 ボール遊び
69 おしごっこ	70 指骨遊び	71 短棒投げ	72 ボールを穴の中へ
73 子猫ちゃん、子猫ちゃん、王様の椅子	74 地下室の扉を登る	75 取っ組み合い	76 壁さんに玉をぶつける
77 宗教行列ごっこ	78 ねずみの尻尾ごっこ	79 訪問ごっこ	80 先頭の子供に従え
81 ベンチから押し落とせ	82 馬ちゃん、牛ちゃん、仔牛ちゃん	83 ボール隠し	84 馬のペヤールトとヘーム伯の4人の子供たち
85 洗礼者ヨハネの祝火	86 焚火遊び	87 松明運び	88 戸口の前で歌う
89 散歩	90 吹流しをなびかせる	91 籠をぶらさげる	

ブリュゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学—（森洋子著／未來社）よりトレース図抜粋

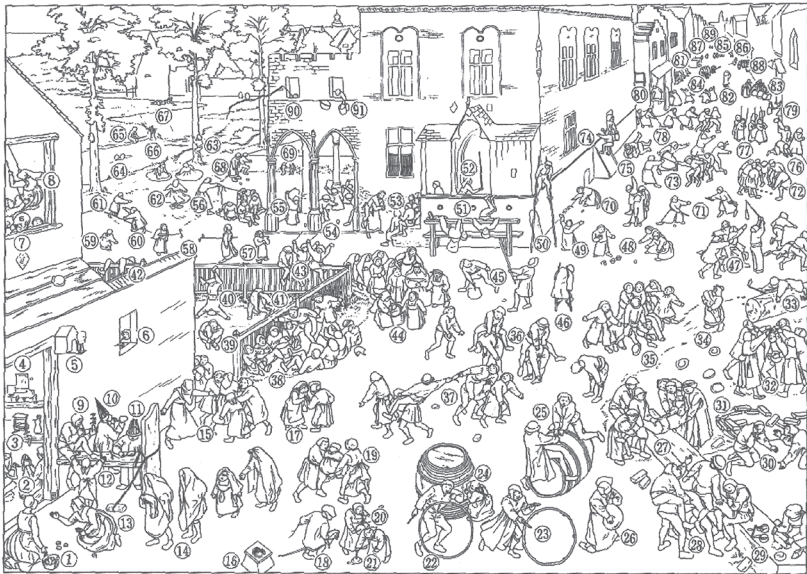


図1 ブリュゲルの「子供の遊戯」（1560年）にみるルネサンス期の遊び  
森洋子「遊びの図像学」1989より

「遊び」再考（山田）

目かくし鬼、お手玉、コマ回し、うまとび、竹馬、輪回し、などなど東西共通の遊びが描かれています。〈宗教行事はキリスト教的な模倣〉、ブリューゲルは、絵のカタログのようなものを描こうとしたのではなく、遊びに象徴される子供の世界は、実は大人の仕事と同じであり、逆に大人がもったいぶってやっている仕事も、神の目から見ると子どものお遊びに等しいのだよ、と言いたいらしかったのだ、と解釈する人もおります。

このころには子ども遊びは価値のないだれ事、という考えが主流で、子どもは大人の未熟な状態であり、半人前と考えたわけです。これが一九世紀までのこども観でした。絵にそれが現れているのは――描かれている子どもたちの服装をよく見てください。大人の小型の服を着ています。貴族も庶民も同じでした。こういう時代が続いていました。

二十世紀に入ってからには、がらりと様子が変わって、子どもの存在に光が当てられます。

いろいろな学問分野で、子ども独自のあり方が尊重され、「遊び」に関して学際的な研究が始まりました。心理学も医学も盛んに児童を研究し始め、『二十世紀は児童の世紀』と呼ばれました。これらの研究成果を受けて、日本の幼児教育界では、子どもが遊びによって発達するという教育観や信念をもって保育実践をしていくという気運がかなり隅々まで行き渡っています。そのため、日本の幼児教育はレベルが高いと世界でも評価されているのです。

そこでつぎに、子ども遊びをめぐって、どんなことが研究され、取り組まれているか、その一部を取り上げてみたいと思います。

## 「遊び」に関する学際的研究の展開

(1) 人間のこども(大人も含め)はどのように遊ぶのか

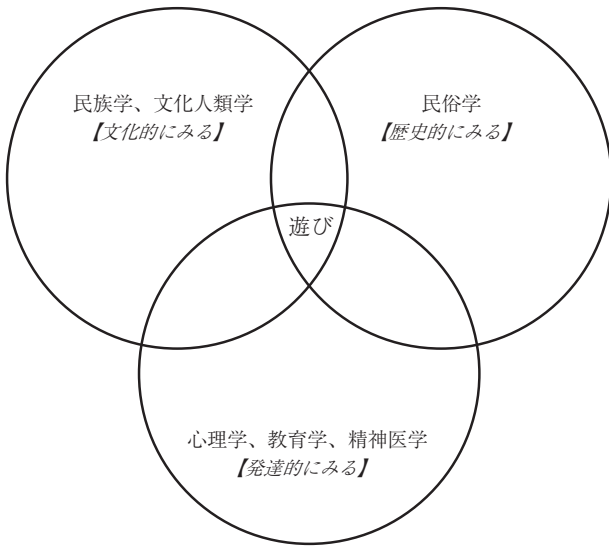


図2

ヒト以外の動物とくに人間に近い野生のチンパンジーの遊び行動を観察して比較した研究では、人間特有の遊びのスタイルが明らかにされています。それは、人間が交互代的な社会的遊びをすることです。「自分―他者(一対一、一対多)」「自分―物」「他者―物(モノを媒介にして他者と遊ぶ)」との間にある関係は、前二つは動物にもみられる行動です。認知メカニズムで考えると……「他者―物」の関係まで含まれるのが人間特有の遊びスタイルであるわけです。これができるためには自分中心ではなく他者の立場にたつて理解することが必要になります。行為を共有している他者の意図は時間の経過とともに変化するものです。交互代的なやり取りを持続させるためには、他者がこれから何をしようとしているの

「遊び」再考（山田）

か、「今・ここ」での文脈にに応じて柔軟かつ適切に読み取る力が必要になります。他者の心理状態をモニターしながら、それに応じて自分の行為を調整しないかぎりスムーズな交互代的な遊びは成立しないのです。

驚くべきことに、人間は生後一年もたないうちから他者の視点を自分の視点と融合させて遊ぶ（山田1993）。こうした性質はヒトに特有であり人間特有の心のはたらきが映し出されているといえます。

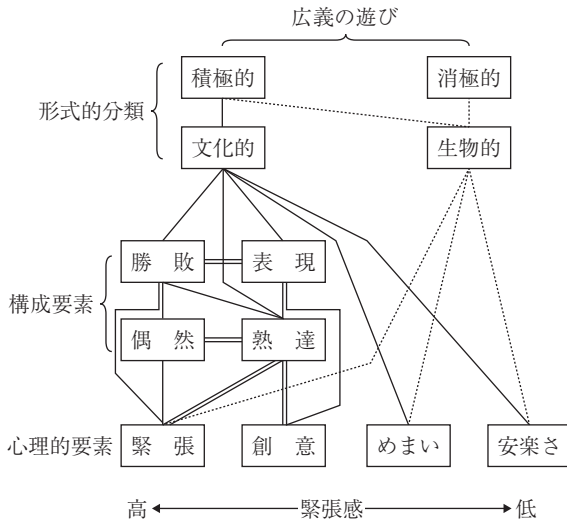
人は、なぜ遊ぶが—楽しいから遊ぶ。遊びに含まれる楽しさの種類を考えたのがホイジンガの後継者であるロジエ・カイヨワ（1913—1978）で、『遊びと人間』の中で遊びの四つの型をあげています。

- ① アゴーン 競技、競争（かけっこ、鬼ごっこ、各種のゲーム）
- ② アレア 偶然、機会（サイコロ遊び、じゃんけんなど）
- ③ ミミクリー 模倣、模擬（みたて、ごっこ、変身など）
- ④ イリンクス 渦巻、めまい（ブランコ、ぐるぐるまわしなど）

英語の play は、活発に素早く動く plega（アングロ・サクソン語）が原型で、カイヨワの分類は、積極的な遊びのもつ面白さの要因の意味あいが強いといえます。

それに対して文化人類学者青柳まこと（1930—）は、広義の遊びを構想し、「積極的な遊び」と「消極的な遊び」をあげています。日本語の「遊び」には、ゆったりとした「ゆとり」の意味合いをも多く含んでいることがここにあらわされています。（たとえば車のハンドルの遊びとかブレーキの遊びとか、本の中表紙の一枚の白紙を「遊び紙」と





★実線は文化的行動、点線は生物的な行動をしめす。生物的行動のばあい、文化的行動に見られるような諸種の要素を欠いて、いきなり安楽さ、めまい、緊張といったような心理状態に直接結びついている。二重線は、遊びの中では共存すると考える要素を結びつける意味で山田 (2005) が加えたもの

図3 青柳まちこによる遊びの諸要素の相互関係

いう「新書・文庫本にはない」また東西での感覚の違いとして、「遊んでいる」という場合には、例えば「手が遊んでいる」というと、私たちは、手が本来の仕事をしていない、とまわっているのとらえますが、イギリスでは手が盛んに動いている様子をいうらしいです。

青柳 (1977) は、図3に示すように、カイロの四類型を構造的にとらえようとしています。ゆつたりとコーヒーやお茶などを飲んでくつろぐとか、テレビを見て笑っているとか、積極的でもスカートを広げてぐるぐるまわりをするなどは「生物的」とし、構成要素を通過せずに心理的要素にストレートに移行して楽しいと感じる「遊び」を、緊張感が低い遊びの系列に位置付けます。

私はたびたびネパールを訪れて文化に触れた中でいろんなことにネパールの人々と日本人を比較して考えることが多いので、ここでも例を出してお話します。ネパールの一般家庭の女性に「あなたはどんなことをしているときに『楽

## 「遊び」再考（山田）

しい』と感じますか？」といったインタビューをしたときに「棚の小間物を片づけて、きちんとなったのを見るとき」〈積極的〉とか、「チャー（お茶）をのみながらおしゃべりするとき」など〈生物的〉で安楽さを求める、比較的単純な系列のものが多く見られました（山田1997）。

一般的には、積極的な遊び、つまり構成要素が複雑に絡み合う **文化的** な、緊張を伴う遊びのほうに関心を向ける傾向が強いです。

面白いとか楽しいと感じるから人は遊ぶのですが、より一層楽しいと感じる条件があります。その条件は、この図3から読み取るとすると、自分のもっている技量や力よりちよつと上の難しさがあるものに挑戦するとき。緊張感が高いが、工夫や練習（熟達）によって獲得できたり、競争に勝ったりするときに、より一層楽しさを感じるということを示しています（山田2005）。

## （2）文化によって遊びはどうかわるか

いろいろな文化のもとで共通の遊びもあるが、よく観察しているとある文化では子どもがよく遊ぶが、ある文化では「遊ばない」ものや、「遊び方が違う」というものにも気づきます。

精神分析学の分野では、「**こどもは不安を遊ぶ**」とか「**こどもは欲求を遊ぶ**」ということをいいます。ジークムント・フロイト（1856-1939）が述べた有名な例があります。親たちが出かけて留守の時、四歳の孫息子の様子が見きりと一つの遊びを繰り返していたという観察です。糸巻を遠くに投げては「フォルト（いない）」引き寄せては「ダ（いる）」と繰り返しつぶやきながら遊んでいた。フロイトははたと気づいた。親たちが留守にしている不安な状態は

自分の力では何ともなしがたい、それを遊びにして、つまり自分のコントロールできる状態にして耐える力にしている、と解釈したわけです。

日本の保育園で2歳児を観察したときには、この類の「いないいない・ばあ遊び」が、砂場や保育室のカーテンのかけや狭い場所でたくさん観察されました(山田1993)。少し大きくなってからする鬼ごっこも、かくれんぼうも、「不安を遊ぶ」ことがうまく組織だてられた、緊張—解消のリズムのある遊びといえます。

私が観察したネパールの子どもの遊びと日本の子どもの遊びを比べてみると面白いことがわかりました。

■ネパールではかくれんぼうや鬼ごっこなどの遊びも、あまり見ない。フロイト流に考えると、それは、ボーダレスな人間関係の強い結びつきがある社会文化の中で一人つきりになることはほとんどなく、「いないいない」の不安が深刻なものにならないからではないか、と思うのです。

■「子どもは欲求を遊ぶ」ということに関しては、日本の子どもたちが好んでする砂遊びや泥んこ遊びを、ネパールの子どもたちが全然しないということに気づいて、なぜだろうと考えました。泥んこ遊びは「ウンチいじりの欲求の代償として、日本の子どもは大いに遊ぶ」のではないか、これは私の仮説ですが。というのも、日本人の親たちはきれいな好き。清潔好き。神経質なくらいです。幼い子供は自分の分身のようなウンチをいとおしく思う。ほんとはさわったりこねたりしてみたい。でも厳しく禁止されます。親はウンチを連想させる土などで子どもが服などを汚すのも許しがたい。が、禁止されればされるほど惹かれるのが道理。ウンチいじりの代償として「土いじり」が好きなのではないか、と私は考えます。ネパールでは子供も大人も非常に土に近い土に親しい生活をしています。また、ウン

チは実際に排便のたびに手で（左の手で）流し拭き取りますので、ウンチいじりの欲求は十分満たされているからだと納得したのですが、どんなものでしょう（山田2005）。……これらは、先ほどの図3では「消極的遊び」の系列に入るかと思えます。

■ネパールの子どもたちの遊びでは組織的な大がかりなものがほとんどない。そういつた遊びをリードする年齢の子供では本物の仕事を分担することが求められているからではなからうか。これも仮説ではありますが。

■ネパールの子どもたちの遊びには、勝敗を競うルールがあまりはつきり認められない。交代をして延々と続けるタイプの遊び方をしています。庶民の生活では資本主義が徹底していないので、持てる者は持たないものに分配する、という平等精神が身につけているからか。

■ネパールではいわゆる賭けは法律で禁止されています。その代り大きな秋祭りの1か月間くらいは解禁になって全面的に認められているので、街のあちこちで賭けごとの輪できる。子どもたちも博打（ばくち）をやっている。私が覗いていると、「やる？ ルピー（約1円）かける？」などと、少年たちが誘うが、私は賭け事が嫌いなのでやったことがなく、その時もあるだけでした。（なぜ嫌いなのか、今度じっくり自己分析してみようと思っているところです。）また、賭け事をやっているのは男性ばかりで、女性は大人も子どもも博打に加わっているのを見かけたことがない。一説によると、女性は人生で「結婚」とか「出産」とかの大きな賭けをしなければならぬので、そんなちいさな賭け事をして楽しくない、ということらしいですが。

(3) 子どもの遊びはどのように発祥したのか

大人が行う祀りごとが、遊びの原型になっている場合が多いです。また生業（なりわい）の姿をまねることもたくさんあります。祀りごとの所作や大人が大事に扱う道具は、子どもにとって神秘的で魅力があります。それらの払い下げが子どもの遊びとなるものが多い。たとえば、

綱引き……収穫祭に行われる農耕儀礼だった。

ブランコ……今日でもネパールではヒンドウ教の祭りに広場に仕立てられ、大人は乗らねばならないが、子どもには乗らせない。祭りが終わるとすぐに取り払われる。子煩悩な親が木の枝などにブランコをつくってやっている風景はごくたまにしか見ない。日本のようにには完全に子供の遊具になってはいません。

ままごと……仏教徒の祀りごとである施餓鬼の賄をまねた遊びから「ごっこ遊び」の代表として定着したといわれています。

お面……ペルソナ、仮面をつけるとその人になる。祀りごとに使われる。これは今でも神事で保存されていますが、こどもたちもしつかりと遊びに取り入れています。

伝承遊び……コマ、お手玉などは約四千年の歴史があり、古代エジプト時代から、さまざまな種類が親しまれてきたことがわかっています。マレーシアのコインの裏にはコマとか子どものおもちやが描かれています。日本のお手玉が今の形になったのは江戸時代後期になってから。折り紙は奈良時代に和紙の製法が伝わってから、神社仏閣での御幣などに使われたことが起源であって、明治になってから正方形の形として保育・教育の現場で使われるようになりま

した。日本の誇るべき遊具の一つとなっています。

四年生の梶原涼君は卒業研究として「伝承遊びについて」書いていますね。「年代別にどんな伝承遊びを遊んだ経験があるか」をアンケートで調べているのを読ませてもらいましたが、最近の小学生が、数字の上では高齢者と遜色なく「遊んだことがある」との答えが高い。しかし、梶原君が定義しているように『大人が教えたわけではなく自然に伝わっていくもの』、という「伝承遊び」の定義でその結果をとらえては、実際の姿とはずれが生じるのではないかと思います。というのは、スマホやタブレットの普及はものすごく、子どもたちを虜にしている現代。小学校などでは、学校行事としてお年寄りに遊びを教えてもらう時間というのを年2回位設けているので、「遊んだことがある」というのはウソではないが、お年寄り世代が遊んだということとは量も質も違うのではないか、やはり、積極的に伝えていかなないと、消えてしまう遊びが多いと思います。安藤正樹という人は、世界の伝統遊びや児童文化財が「世界子ども文化遺産」という名前で呼ばれるようになることを強く望む、と、遊び伝承の運動をしているようです（安藤2014）。

#### （4）精神的健康と遊びの関係

遊びには次の必須の三要因があります。①自由さ ②柔軟性 ③交互性

自由さ…… 想像力、創造性

柔軟性…… 場に応じた仮面（衣装も含め）の付け替えが可能

交互性…… 視点を相手にあわせられる、社会性

精神科医は、統合失調症とか鬱の患者さんと接していて、はつきりとこの三つの事に問題があると感じていると述べます(町沢1986)。能力は高いが生真面目で、融通が利かない。いろいろに変化できない。自分の世界が中心で、相手の視点に立てない、つまり「遊べない」人なのである。診断的にも、よく似た症状が見られる患者さんであつても、遊びこめる人は統合失調症ではないと診断できる。子どもころから遊びが下手、遊べない子は要注意。発病を予防するためにも、幼いころから遊びを楽しむ手助けをする必要があると強調しています。逆に言うと、人は幼い時から十分遊ぶことによつて、これらの三要素を育てることができるといふことでしょう。

環境の中でかかえてしまった葛藤は、強い不安や不適応を引き起こします。葛藤を解消する間接的な一つの手立てとしておこなうプレイ・セラピー(遊戯療法)は子どもの心理療法としてよく使われます。治療目的としての遊びのもつカタルシスの価値のほかにもシンボルの価値によつて遊びを見ているといふことが分かります。遊具などのモノをどう使うか、こどもと物との関係、こどもとカウンセラーという他者との関係の中で交互代的遊びが可能か、といった点を見ることで診断的にも有効になります。「遊び」とは「解読するべき言葉」であると精神療法家はみなしています。

「大人も遊ぶ」のは人間の特徴とは言つても、私たちは毎日遊んで暮らすこともできません。それを実現できるのは、「遊び心をもつて」日々暮らすことではないでしょうか。

伝承遊びの演習 (最終講義参加者の皆さんに広告紙で紙鉄砲をつくってもらつた)

「遊び」再考(山田)

「遊び」再考（山田）

「遊び 最高！」

ご清聴ありがとうございました。

引用&参考文献

- 青柳まちこ「遊び」の文化人類学」1977 講談社現代新書
- 安藤正樹「世界とつながる日本の伝承遊び」2014 日本保育学会会報158号
- アンリオ・J「遊び」1969（佐藤信夫訳1974）白水社
- カイヨウ・R「遊びと人間」1958（大林太良訳1990）講談社
- かこさとし「日本の子どもの遊び」上・下、1979・1980 青木書店
- 亀井伸孝編「遊びの人類学 ことはじめ」2009 昭和堂
- 原ひろ子「子どもの文化人類学」1979 晶文社
- 平林章仁「橋と遊びの文化史」1994 白水社
- ホイジンガ・J「ホモ・ルーデンス」1938（高橋英夫訳1973）中央公論社
- 町沢静夫・吉本隆明「遊びと精神医学―こころの全体性を求めて」1986 創元社
- 森洋子「ブリュッゲルの『子供の遊戯』―遊びの画像学」1989 未来社
- 柳田國男「子どもの風土記」1990 柳田國男全集23、ちくま文庫
- 〃 「昔話覚書」1990 柳田國男全集8 ちくま文庫
- 山田英美「乳幼児の遊び―いいないない・ばあ（的）遊びを通して」1993 『音楽療法』第3号 pp.9-15
- 〃 「ネパール女性のライフスタイル（Ⅱ）」1997 山梨大学教育学部研究報告 第48号 pp.265-275
- 〃 「民族と文化」2005 『音楽療法』第15号 pp.1-10